

ヤマトシジミの初期成長② (野外調査から)

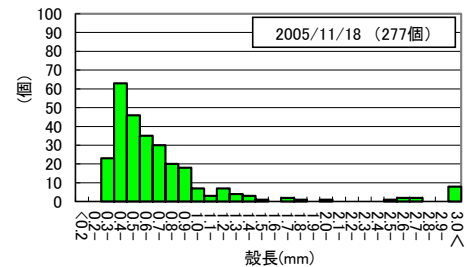
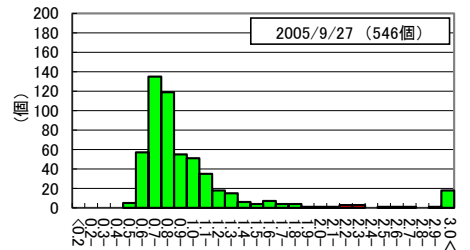
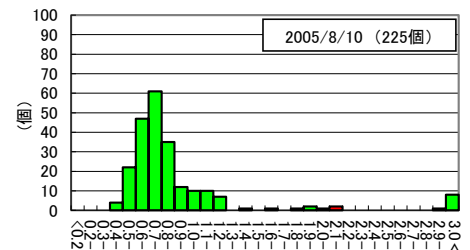
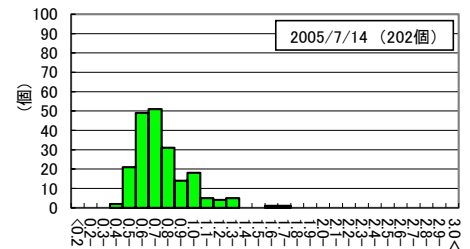
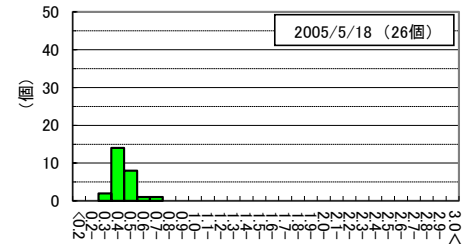
2004年、小川原湖では数年ぶりに塩分が高くなり、ヤマトシジミ産卵のための塩分環境が整ったことで、大量の産卵発生が確認されました。この大量発生した稚貝を確認するために2005年5月から11月まで小川原湖西岸の浜台で稚貝の発生状況を調査しました。

調査はエクマンバージ採泥器と呼ばれる15cm×15cmの底質を採取する装置を使い、浜台の水深1m付近でサンプリングしました。サンプルは底質の砂ごと持ち帰り、研究所で稚貝を拾い出し、顕微鏡下で殻長を測定しました。

5月の稚貝の殻長は、0.4mm以上～0.5mm未満にピークがありました。このピークが、7月には0.7～0.8mmへ、9月のピークは0.7～0.8mmの区間で7月と変わりませんがピークより小型の個体が減少して全体的には大型化しています。

この結果は、種苗生産を行い小川原湖水で飼育したときの傾向(秋までに0.5mm前後になり越冬し春から再び成長し満1年で1mm前後に成長する)と同様の成長を示しており、小川原湖で夏に生まれた稚貝は、秋までに殻長0.4～0.5mmに成長し冬を越し、水温上昇とともに再び成長し1年で1mm弱になると考えてよさそうでした。

11月の殻長のピークは、0.4～0.5mmと小型化しました。これはこの年(2005年)の夏に生まれた群が確認され始めたためと考えられます。2005年も湖水の塩分が高くヤマトシジミの産卵には良い環境が整っていたため、多くの稚貝が生まれて資源は回復に向かいました。



浜台のヤマトシジミ稚貝の殻長組成
エクマン採泥器 1回分